

目 次

- ・ 2001年度 第18回日本図書館文化史研究会研究集会・総会報告
- ・ 「京都オプションツアー」に参加して (小川 徹)
- ・ 資料紹介 Suzanne Hildenbrand, Reclaiming the American Library Past : Writing the Women In (Norwood, NJ:AblexPub. , 1996) (田口 瑛子)
- ・ 2001年度第2回関東地区研究例会のお知らせ
- ・ 会員動向 / 事務局より

2001年度日本図書館文化史研究会 第18回研究集会報告

発表1 : 大阪府立図書館と今井貫一

垣口 弥生子

(大阪府立中之島図書館)

大阪府立図書館の初代館長、今井貫一は、創立期の大阪府立図書館で30年間(1903[明治36].4-1933[昭和8].9)館長を勤めた。その業績を振り返る時、明確な図書館思想を理論的に領導する功績はなかったかも知れないが、図書館経営という視点からみれば、図書館が未だ国民生活に根ざしていたとはいえない明治・大正期に、大阪人の図書館への支持に応えるべく地方自治体としては破格の大型図書館を実現した。当時刊行された『図書館総覧』によれば、昭和12年調査で、大阪府立図書館は閲覧人員総数および1日平均とも、帝国図書館を抜いて全国1位となっている。発表者は、この時代の大阪府立図書館の果たした役割を、欧米の図書館を模倣しつつ、大型図書館がいかにか有用な機能を持つかを、大衆の目の当たりに具現したところにあると考え、以下の諸点にそのサービスの時代的先進性を捉えようとした。

- ①閲覧席の増加。開館時の閲覧席168席から順次増やし、1909(明治42)年の室配置の大変更で計295席、1915(大正4)年の本館増築で閲覧席は、計568席に増加。
- ②書庫増築により収蔵冊数の増加への対応を図る。
- ③1915年の増築で3階部分に経済商業部・理工工芸部閲覧室を設け、主題室としてのサービスを図る。
- ④目録整備。今井は欧米視察の際、ALA大会で議会図書館長パトナムが説いた「図書館利用の便宜をはかるための、全国共通の目録整備の重要性」に大いに共感し、帰国後、全国の図書館に目録整備をうったえてゆく。

また、発表の結びとして、戦前期(1904-1944)の大阪府立図書館は、近世以来の

「上方文化」の土壤に支えられたく大阪図書館>であったことを挙げ、今後はその視点からも研究を続けて行きたいことを述べた。

発表2：記述独立方式と森耕一：非基本記入目録方式の成立

志保田 務

(桃山学院大学)

1. 基本記入批判と相性原理 森耕一(以下、森)の目録研究は日本図書館協会(以下、JLA) 件名標目委員会参画(1953)に始まる。1955年の森の「日本目録規則解説に対する意見」(『図書館雑誌』vol. 49, no. 7)を杉原丈夫が「相対性原理」と表現。
2. 記述独立方式の成立 「標目と記述の分離：目録作業の合理化のために」(『図書館界』vol. 7, no. 6 1955)が基幹論文。1957年「記述独立方式」と森が命名。
3. 『中小都市における公共図書館の運営』(JLA1963;『中小レポート』)から目録省力化が進む。対策を迫られ JLA は翌年『整理技術テキスト』を出した。同書に森はカナだけの標目を例示し、JLA 目録委員会の非難を受ける。基本記入方式のNCR1965年版策定。「テキスト」はこれとの調整を請われ「簡素化の手引き」の副題を付し改訂。同書で森は目録委員会に背き、目録の章を記述独立方式で貫いた。
4. NCR 新版予備版の成立 1970年 JLA は整理技術全国会議で大阪市立図書館の事例報告(石塚栄二)等聞き、非基本記入方式採用を決定。同年前後 NCR 新版対策か森は「目録の相対性」論文を連発した。1977年 NCR 新版予備版が出された。
5. 非基本記入方式の目録規則成立の要因 非基本記入方式の NCR 新版予備版成立は JLA の決断によるがNDL『日本全国書誌週刊版』の機械可読化も要因となった。

記述独立方式を代表とする非基本記入方式は、標目の相対性を実現し、目録記入の構造に当為性を注入した。ただ、森の物理原則を NCR 新版予備版が容れた点の問題を残した。ICCPを通して森が出会ったE. ヴェローナの「文献単位と書誌単位」(森耕一訳『Information Service N. S.』vol. 1, no. 3/4, 1960)の訳者前書きで「書誌単位」を「図書単位」と読み替えたのが森が物理単位に進む一因となった。「書誌単位」はNCR1987年版で実現した。非基本記入方式は1977年から堅持されている。森の近代目録法への貢献は共同研究の石塚栄二、藤田善一と共に高評されよう。

発表3：日本最古の図書館：「書屋」再考

小川 徹

1992年のこと、法隆寺金堂の釈迦三尊像の台座の解体修理中、台座下座に使われていた部材に「書屋」「尻官」「辛巳年」などの墨書が発見された。この部材は他の建物に使われていたものの転用であり、文字は元の建物で使われていたときに書かれたもので、「書屋」は聖徳太子の文書管理機関、あるいは書物倉かと推測され、「辛巳年」は621(推古29)年と考えられている。報告では、「書屋」は奈良時代の後宮の「書司」、万葉集の「書殿」、東大寺写書所の「書堂」から考えて図書館

としてよいとした。それは、法隆寺が天智期に焼失した後、金堂が天武・持統期に再建され、本尊として運び込まれた釈迦三尊像は、堂内の大きさに比べて小さく、バランスを取るために大きな天蓋、光背とともに台座の下座を新たに大きく造ったのではないかと考えられ（そのために台座の上座に比べて下座は大きすぎる）、そこで使われた部材の墨書はその時に近い時期に書かれたものであろう、従って「辛巳年」は621年の60年あとの681（天武10）年であった可能性は捨てきれないと考えた。「書屋」は天武あるいは持統期のものであり、聖徳太子と結び付けて考えなくてもいいのではないかと、またあわせて墨書は釈迦三尊像の台座のために法隆寺が部材を譲り受けたさいのいわば謝礼の送り先を記したものであったのではないかと推測した。

発表4： 旧東ドイツの図書館と検閲：

旧国立ドイツ図書館の『閉鎖書庫』を一例として

金城 まりえ

(京都大学大学院教育学研究科)

「ドイツ民主共和国」時代の図書館を通して「検閲」に関する法令等は出されていないが、旧東ドイツ時代の学術図書館には通常の利用には供されない蔵書があり、それらの蔵書には「利用制限」が課せられていた。この図書館蔵書の「利用制限」に関する法律は第二次世界大戦後に行なわれた「図書館の浄化(活動)政策」の時に出されたものが根拠となっている。図書館蔵書の非ナチ化・非軍事化政策の一環として、1945年9月15日にソ連軍ドイツ管理局から「ジューコフ元帥命令」、1946年5月13日には共同管理委員会から「命令第4項」が出され、各図書館の図書館長はそれぞれの占領地区管理局へ排除された文献を廃棄処分するために引き渡すことが義務付けられた。しかし命令第4項の改定が行なわれ、排除文献の一部を研究目的のために収集し保管することが認められた。ソ連軍占領地区ではベルリン公共学術図書館(後の旧国立ドイツ図書館)とドイチェ・ビューヘライを排除文献の保管場所とした。ドイチェ・ビューヘライには「文献検査委員会」が設置され、そこで浄化活動の指針となる『排除リスト』が作成され、暫定版と補遺版3冊を含む計4冊が刊行された。旧国立ドイツ図書館では排除文献の保管場所として「閉鎖書庫」を設置し、研究目的の利用のみを許可した。利用者には学生、学者、政治家、研究所職員、出版社関係、作家などがおり利用申請をしなくてはならなかった。「閉鎖書庫」は1961年に「特殊研究目的文献」と改名された。利用制限を伴った蔵書には、ナチ的・軍国主義的な内容を持つ文献に加えて、資本主義的、反ボルシェヴィズム、反社会主義的内容等の文献も含まれていた。

発表5：20世紀前半期アメリカ公共図書館論の批判的検討

吉田 右子

(図書館情報大学)

本発表では20世紀前半期アメリカ公共図書館論の分析結果を踏まえ、公共図書館論の理念的枠組みを導き出すことを試みた。公共図書館が市民を自己学習へ導くことを最前に掲げる教育機関から、市民の多様な知的要求を満たす多目的な文化機関へと変遷する中で、公共図書館論は公共図書館の理念をどのように記述してきたかを考察した。

20世紀前半期の公共図書館論は、公共図書館が同時代のコミュニケーション様式を受容しサービスを行っていくことを提唱しながらも、思想的には近代公共図書館成立の根幹に存在する教育的な機能を重視する図書館理念を継承し、さらにメディアの適正な配置とデモクラシーの確立等によって規定される自由主義的コミュニケーション論を導入した。こうした理念を公共図書館論が取り込むことによって、公共図書館の最終的な課題は適切な資料の選択の問題へと転換された。すなわち公共図書館論はメディアを産み出す文化構造や文化再生産についての議論を留保することで、文化的な葛藤によって生じる問題を回避することとなった。

発表では公共図書館論が文化構造そのものを研究対象から捨象していたことにより、議論されなかった課題を明らかにするためには、批判理論的アプローチが重要な示唆を与えることを指摘し、公共図書館とコミュニティ・メディアの連関を文化批評の段階にまで展開することで、1940年代の公共図書館論の限界を克服する方向が可能であることを提示した。最後に文化政治学領域におけるメディア・スタディーズの枠組みに依拠しながら、今後の公共図書館研究における批判的研究の展開可能性を討究した。

発表6：パブリック・フォーラムとしての公立図書館：歴史的展開

前田 稔

(筑波大学大学院法学研究科)

パブリック・フォーラム論は公共の討論の場所に憲法上の保護を与える概念的枠組みとして、アメリカ憲法判例上発達した。本発表では公立図書館は蔵書群と利用者が静穏に討論を行う場であるととらえ、パブリック・フォーラム論を援用し、公立図書館は原則として、価値判断をまじえずに、あらゆる知識ないし資料を提供する義務をもつものと解する。このため相互貸借・インターネットの提供に際しては、図書館は価値判断を加えてはならないと考える。ただし予算・書架スペースの制約がある以上、図書の購入・除去については、表現者が立脚する特定の見解の排除を行うのでなければ、図書館職員にはその職責として内容を参照する裁量が認められると考える。

もっとも連邦最高裁判所は歴史的にパブリック・フォーラム論を限定的に使用してきた。道路・公園における表現活動を、政府の「規制」から保護するという従来

の枠組では、公立図書館にパブリック・フォーラム論を適用することは困難である。しかし1990年代後半から連邦最高裁判所は言論活動の「助成」に理論の対象を拡大したと分析するならば、公立図書館にたいしてもパブリック・フォーラム論を法解釈上援用しようという結論に至る。

2001年度 日本図書館文化史研究会 総会報告

議長に山本順一氏（図書館情報大学）を選出した後、議事に入った。

先ず、次期運営委員に下記議案3の通り7名を選出した。選出された次期運営委員は別室で代表と事務局長を互選するための協議に入った。

総会は、この間に議事を進め、2000年度の活動報告と決算報告を承認し、2001年度活動計画ならびに予算案も承認した。

互選により代表には阪田蓉子氏（明治大学）、事務局長には小黒浩司氏（作新学院大学女子短期大学部）が選出された旨報告がなされ、拍手をもって承認した。阪田、小黒両氏から挨拶があった。運営委員の任期は2002年4月から3年間である。なお、監事については新運営委員より、人選を行いニューズレターで報告することにより承認を得たい旨提案され了承された。

学術会議に研究団体として登録する件について（議案4）、原案通り可決され次期運営委員により申請作業が行われることになった。

20周年記念事業について（議案5）、実行委員会から進捗状況の説明があった。機関誌の20周年記念号の目次案（仮）が示され、了承された。12月末を締め切りとして原稿を集めるので協力を得たい旨依頼があった。

議案

1. 2000年度報告（資料はニューズレター76号掲載）
 - a. 決算報告
 - b. 活動報告
2. 2001年度活動計画（案）
 - a. 2001年度活動計画案
 - ①機関誌『図書館文化史研究』No. 18(2001)の編集・刊行
2001年9月28日刊行
 - ②『ニューズレター』の編集・刊行（No. 76-79の4回、No. 76-77は刊行済）
 - ③第18回研究集会・総会（京都）の開催（2001.9.8-9）
 - ④研究例会の開催
関東地区で従来通り年3回を予定（第1回は6.16開催済）
関西地区でも、開催できるよう努力したい。
 - ⑤運営委員会の開催 必要に応じて開催。第1回は5.10開催済

b. 2001年度予算案 (2001.4~2002.4)

(資料はニューズレター76号掲載)

3. 次期役員を選出 (2002年度~2004年度)

運営委員候補 石井敬三、大沼宜規、小川徹、奥泉和久、
小黒浩司、阪田蓉子、中林隆明 (50音順)

監事候補 未定

4. 日本学術会議に学術研究団体として登録する件について

昨年の総会で日本学術会議への学術研究団体登録申請をしてはどうかという意見が出た。その後ニューズレター74号で意見を募り、日本学術会議に対し具体的な手続きについて問い合わせを行った。会員からは、格別の反対意見は出されていない。

5. 20周年記念事業の推進について

機関誌19号(2002年9月刊行予定)を20周年記念号とする。

20周年記念集会及び記念パーティーの開催(開催地は東京)

具体案は今後詰めていく。(たたき台はニューズレター74号掲載)

事務局報告

機関誌発行予定。

会員数

項目別支出一覧

事務局費(8,404)

会議費	1,732	2000.4.29	於:京都(監査)
消耗品費	3,402	2000.11.5	宛名シール購入
通信費	870	2000.9.18	入会案内資料発送
	2,400	2000.9.21	葉書、切手事務局用
小計	3,270		

ニューズレター(117,962)

No.72	12,120	2000.5.13	編集印刷
	12,220	2000.5.15	送料
小計	24,340		

No.73	18,475	2000.8.5	編集印刷
	13,160	2000.8.5	送料
	小計 31,635		
No.74	13,632	2000.11.18	編集印刷
	12,000	1999.11.18	送料
	小計 25,632		
No.75	23,395	2001.2.7	編集印刷(含む名簿)
	12,960	2001.2.7	送料
	小計 36,355		

機関誌刊行費 (216, 867)

編集費	4,000	2000.4.9	原稿コピー作成
	1,950	2000.4.10	原稿コピー発送
	1,800	2000.4.19	原稿コピー発送
	2,450	2000.4.23	原稿コピー作成
	1,350	2000.4.24	原稿コピー発送
	630	2000.6.1	大封筒原稿用購入
	1,800	2000.6.1	原稿コピー作成
	2,350	2000.6.1	原稿コピー発送
	760	2000.6.5	最終原稿発送
	662	2000.8.26	中封筒購入(納本等発送用)
	3,270	2000.9.9	小黒氏立替分精算
	小計 21,022		

発行費用	166,085	2000.8.28	日外支払い(委託送料含む)
	1,050	2000.8.28	事務局発送分送料
	620	2000.10.11	納本等送料
	小計 167,755		

抜刷費用	5,250	2000.8.28	抜刷用折本(日外)
	21,420	2000.10.3	抜刷製本
	1,420	2000.10.5	抜刷送料
	小計 28,090		

研究会運営費 (5, 800)

研究集会・総会	2,400	2000.9.8	総会用資料作成
研究例会	1,000	2000.6.17	関東地区研究例会資料作成
	2,400	2000.7.22	研究例会打ち合わせ
	小計 3,400		

次期運営委員決定

別項の総会報告にもありますように、次期運営委員が次のように決定しました。

(任期は2002年4月より3年間)

代 表	阪田蓉子 (明治大学)
事務局長	小黒浩司 (作新学院大学女子短期大学部)
運営委員	石井敬三 (大阪府立大学工学部図書室)
	大沼宜規 (国立国会図書館)
	小川 徹 (元・法政大学)
	奥泉和久 (横浜女子短期大学・総務部)
	中林隆明 (東洋英和女学院大学)

よろしく願いいたします。

2001年度研究集会収支報告

収支決算は以下の通りとなりました。ご了承ください。

研究集会

収入

参加者41名

会員 $500 \times 24 = 12,000$

非会員 $1,000 \times 6 = 6,000$

計 18,000円

発表者6名と会場設営等お手伝いいただいた京都大学の大学院生の方5名は参加費免除としました。

支出

コピー代 12,733

送料 740 (京都市観光局地図送料着払い)

お茶・紙コップ 2,310

計 15,783円

残金 2,217円

懇親会

23名の参加がありました。

$6,000 \times 23 = 138,000$ 円

参加人数分はっきりでお願いしました。

オプションツアー

22名の申込がありました。

不参加となった2名の方の参加費は返金しませんでした。

当日朝、台風接近のため不参加となった3名の方の参加費はご厚意によりご寄付いただきました。

収入

3,000	×	17	=	51,000	
3,000	×	3	=	9,000	(寄付)
2,000	×	2	=	4,000	(申込金)
				計	64,000円

支出

55,000		バスレンタル、運転代行、保険、燃料代全て含む
8,400		見学先への進物お菓子(含む税)
		計 63,400円
		残金 600円

以上の残金、及び懇親会2次会の残金(2,140円)を寄付する旨の申し出がありましたので、合わせて研究会会計に寄付として入金いたします。

「京都オプションツアー」に参加して

小川 徹

今年の京都での研究集会総会の目玉は、その翌日の事務局長石井敬三さん企画実行のオプションツアーでした。当日、台風が近づき参加を断念したり、途中で帰った方もいましたが、13名、最後まで石井さんの簡にして要をえたガイドに堪能しつつ最後までツアーを楽しみました。

まず、同志社の構内の古きよき建物、1886(明治19)年に作られたアメリカン・ゴシック様式の礼拝堂ほかを見学。案内役の学生がいたのにはびっくり。それだけのものがあり、見学者も多いのですね。

ついで京都大学人文科学研究所、北白川の分館の見学。現在は漢字情報研究センター。建物は「スペインの僧院を模したロマネスク様式に東洋風を加味した」(パンフレット)なかなかのもの。そしてその書庫。真ん中は吹き抜け。四周の3層のがっしりした構造の書架が見渡せます。そのいわば手の届く範囲にぎっしりつまっている典籍。そして閲覧机。これらは東洋学の重さを実感させました。

次に京都府立総合資料館、ぼう大な蔵書のなかから今でもすぐれものが出現する(先日は「朝鮮通信使行列図」が発見)。まず国宝東寺百合文書的一端を見ました。石井さんは、解説のある著名な文書の展示を依頼し、その解説をプリントして下さ

る気配りのされよう。一同そのプリントを手にし、説明をお聞きしながら、現物をつぶさにみることができました。その後図書館部分へ。書庫の見学。多様な京都関係の資料の集積。さすがです。ただ職員の方ははしばしにいたるまでの資料の収集は無理といっておられました。困難はあるでしょうが、可能な限りあつめて後世に残してほしいものです。

最後に陽明文庫。洛北宇多野の山中。雨の中。バスは途中まで。少々歩いて文庫に。そこに二棟の収蔵庫。手前の庫の展示室で国宝の御堂関白記など何点かの貴重な書などを、文庫長の名和修さんの説明を受けつつ見る事が出来ました。

さてこのツアー、研究会がまたひとつふくらみをもつことができました。石井さん、そして石井さんとともに裏方を務めてくださった深井耀子さん、ありがとうございました。

<資料紹介>

Suzanne Hildenbrand, *Reclaiming the American Library Past: Writing the Women In* (Norwood, NJ: Ablex Pub., 1996)

田口 瑛子

(京都精華大学)

刊行後5年以上たっているので新刊紹介とはいえないが、日本でも英語圏でも類書がないと思われるので、ここに紹介する。

標題が内容を的確にあらわしている。アメリカ図書館史に書かれてこなかった女性をとりあげた論文集である。編著者ヒルデンプランドは1章で、図書館史は図書館政治学の影響が強く、歴史学の主流からはずれているだけではなく、図書館女性を扱ったものも女性史の主流からもはずれている、遅れているという。1部7章で図書館ハーストリーをとりあげ、2部4章では知的自由などの図書館専門職のいくつかの問題をジェンダーという視点から分析している。

フェミニストたちは「歴史」historyはhis storyで、人口の半分である女性をほとんど反映していないと主張する。そこからhisではなくher story、herstoryが必要だと要求し、フェミニスト歴史学者はそれにこたえる研究を蓄積してきている。

図書館史の分野ではどうであろうか。数の上では女性が多数派である図書館界でハーストリーがないわけではないが、十分に多いとはいえない。ジェンダーの視点から図書館史をとらえなおすことが大切であるが、(遅れている図書館史では)ハーストリーもいまだに重要であるとヒルデンプランドはいう。

本書がとりあげているのは都市部白人中産階級アングロサクソンの図書館員だけではない。アン・キャロル・ムーアやキャサリン・シャープは日本でも知られているが、他はほとんどの読者には未知の図書館員であろう。たとえば、新しい女アデレード・ハッセは政府刊行物という分野を初期に開拓した。西部の土地付与カレッジで、ほとんどなにもないようなところから図書館をつくり、その発展に尽くした

女性たちが、キャンパスと地域ではたした役割も興味深いものである。「ジーン・ブラックウェル・ハトソンとショーンバーグ黒人文化研究センター」は差別的な時代に成長した黒人女性が世界でも有数のアフリカ系文化の専門図書館を発展させていく生き生きとした物語である。「プラット・インスティテュート図書館学校」のジョセフィン・ラスボーンの学校をまもる戦いは“ウィリアムソン報告”の隠された目的を浮かびあがらせる。

『文化の使徒』（ディー・ギャリソン著 日本図書館研究会，1996）はそれまでの他の図書館史の著作と比較すれば、多数の女性をとりあげている。しかしフェミニスト図書館学研究者と図書館員は、初めて女性を多数図書館史に登場させたギャリソンの功績を認めつつも、アメリカ図書館の成功物語である児童サービスを矮小化し、図書館職の発展に女性化の及ぼした否定的な影響を言い立てるギャリソンを、性差別の被害者である女性を非難している(victim beating)と指摘する。この『文化の使徒』をのりこえるためにも、ヒルデブランドをはじめとする図書館女性12名による「アメリカ図書館史に女性を書きこんだ」本書の功績は大である。

一方日本では図書館女性史も図書館女性を研究対象にした論文もきわめて少ない。そのなかで、「図書館人たちの饗宴：第二回 児童図書館員のパイオニア・小河内芳子」（名取二三江著『図書館の学校』2001年8月号）は日本における数少ない図書館女性のハーストリーとして大いに注目にあたいする。同様なころみが積み重なることを期待する。

◎関東地区研究例会(2001年度第2回)お知らせ

日時 12月15日(土) 15:00～17:00
場所 法政大学ボワソナードタワー12階 1201室
発表 石井 敦：図書館史研究会発足前後のいきさつ

問い合わせ先：小黒浩司（作新学院大学女子短期大学部）

原稿募集

- ◇ 「ニューズレター」の原稿を募集しています。
研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局（石井）あてお送りください。

会員動向
新入会員

住所訂正

事務局より

9月の研究集会で1日目あるいは2日目のみご参加の方で、参加されなかった日の資料を受け取っておられない方は、事務局までご一報いただければ郵送させていただきます。ご遠慮なくお申してください。

2002年4月に事務局が移転します。引継作業を軽減するため、2001年度会費の納入にご協力ください。未納となっている方には、今回早期納入お願いを記した紙片を同封いたしました。また3月末から4月前半の会費納入は避けてください。5月のニューズレターがお手元に届いてから次年度会費を納入していただければ作業がスムーズです。

住所変更等についても、早めに事務局にお知らせください。

日本図書館文化史研究会 事務局 石井敬三